

動詞「増える」の意味分析

——日本語教育の観点から——

李 澤 熊

1. はじめに

動詞「増える」は基本動詞として扱われ、日本語教育においても重要な学習項目の一つとなっている。しかし、「増える」は多様な意味を担っている多義語であるため、その学習指導法というのは必ずしも容易ではない。

現在刊行されている辞典・辞書類を調べてみると、「増える」は多義語として扱われているが、それらの意味を選んで掲げる基準は必ずしも明らかではない。また、当然のことながらそれぞれの意味の相互関係も不明確である。

そこで、本稿ではまず「増える」が持つ複数の意味（多義的別義）を記述し、それらの複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにする。次に、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導法について考察する。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「非共起例（誤用例）」も提示し、その理由・原因について検討する。

具体的な考察に入る前に、まず、1.1節では、多義語の基本的な性質、多義語の位置付けについて先行研究を踏まえて概観する。続いて、1.2節では、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき簡略に説明する¹⁾。

1.1. 多義語の位置付け

国広（1982）は、多義語と同音異義語について、次のように定義している。

「多義語 (polysemic word)」とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う²⁾。(国広1982: 97)

「同音異義語」とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである。(国広1982: 97)

上記のように、国広（1982）は「多義語」と「同音異義語」を区別する基準として、意味的な関連の有無を提示しているが、これは決して明確なものではなく、「同音異義と多義の現

象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことであると考えるべきである (p. 108)」と述べている。さらに、具体的に観察される2つ以上の意味が、多義であるのか、単一の意義素の文脈的変容であるかの判断基準について、「ある一定の意味を想定し、それが文脈の相違に平行して少しずつ変わって現れると考えられるか否かということである (p. 109)」と述べている。このように、国広 (1982) は同音異義語、多義語、単義語 (単一の意義素の文脈的変容) のそれぞれの境界を明確にすることは困難であり、連続的であるという立場を取っている³⁾。

ところで、靱山 (2016) は、多義語に関する膨大な研究を詳細に検討し、多義語の多様性について、次のように述べている。

ある語 (音形) に (何らかの観点から) 複数の意味が想定できる場合、その複数の意味がどの程度自立性 (顕著性・慣習性) を有するかは、程度問題 (連続的) であるという見通しが立てられる。なお、ここでの自立性の程度とは各母語話者における定着の程度および言語共同体における慣習性の程度のことである。また、複数の意味の関連性の程度も連続的であると考えられる。つまり、単義語と同音異義語を両極とし、その中間に、各意味の自立性の程度、複数の意味の関連性の程度が異なる多様な多義語が連続的に存在すると想定される。(靱山2016: 512)

以上のように、本稿では、多義語の定義、位置付けなどについて、基本的に上記の先行研究と同じ立場に立って、考察を進めていく。

1.2. 多義語分析の課題

多義語分析の課題について、詳細に記述・検討されているものとして、靱山の一連の研究があげられる。靱山 (2001, 2002, 2019, 2020, 2021) は、多義語の分析において明らかにしなければならないこと、即ち、多義語分析の課題として、少なくとも以下の1)~4)が考えられると述べている。

- 1) 何らかの程度の自立性を有する複数の意味 (多義的別義) の認定
- 2) プロトタイプの意味の認定
- 3) 複数の意味の相互関係の明示
- 4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

本稿では、上記の課題のうち、主に3)と4)の課題について詳しく検討する。

まず、3)の課題について、靱山 (2001: 33) は多義語の定義から必然的に導かれるもので

あるとし、「多義語の複数の意味は相互に何らかの関係が認められるのであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる」と述べている。また、「多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということを一明らかにすることも重要な課題である」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連付けに重要な役割を果たすと考える」と述べている。本稿では、多義語の複数の意味の関連性を3種の比喩のうち、メタファーとシネクドキーの観点から考察する。なお、定義については、舩山・深田(2003)の記述を引用する⁴⁾。

メタファー (隠喩)：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。「類似性に基づく」というのは、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主體的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である⁵⁾。(舩山・深田 2003: 76)

以下、メタファー (隠喩) についての具体例を確認する。ここでは2種類の例をあげる。まず、位置や形状など、いわゆる「外見の類似性に基づくもの」として、「パンの耳」「お金の耳をそろえて返す」における「耳」という語があげられる。「耳」は、本来〈脊椎動物の頭部の左右にあって、聴覚と平衡覚をつかさどる器官〉という意味で用いられるが、ここでは、〈織物・紙類・食パンなどの端のほうの部分〉という意味となる。これは、(人間の) 顔における耳の位置に着目し、平面的な具体物の端に位置する部分を(人間の) 耳に例えて表現していると考えられる。つまり、外見の類似性に基づくメタファーとしてとらえられる。

次に、「抽象的な類似性に基づくもの」として「荷物」という語があげられる。「荷物」は、本来〈運搬や運送をするための物〉という意味で用いられるのが、「子供をお荷物だと思う親が増えている」というように、「人間」に関して使われる場合もある。この場合の「荷物」は〈何かをする際に負担となる人〉というように記述することができる。なお、両者の間からは〈ある対象が(主体にとって) 負担となる〉という共通点(つまり、抽象的な類似性)を導き出すことができ、メタファーによって意味拡張が成り立っているととらえられる。

シネクドキー (提喩)：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい(指示範囲が広い)ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい(指示範囲が狭い)ということである。(舩山・深田 2003: 79)

続いて、シネドキー（提喩）の例を取り上げる。まず、より一般的な意味がより特殊な意味を表す例として、例えば、「(病院の診察で) 石がたまっていますね」における「石」は〈結石あるいは胆石〉という意味を表しているが、これは〈(岩石や鉱石などを含む) 石〉の一種であると考えられる。つまり、上位概念であるより一般的な〈(岩石や鉱石などを含む) 石〉という意味が、下位概念であるより特殊な〈結石あるいは胆石〉という意味として用いられているということである。また、これとは逆の例として、「お茶でもしませんか?」における「茶」があげられる。この場合の「茶」は〈(コーヒー、ジュースなどを含む) 飲み物一般〉を表すと考えられるが、一般的に〈茶〉は〈飲み物一般〉の一種であると考えられる。つまり、より特殊な〈茶〉という意味が、より一般的な〈飲み物一般〉という意味として用いられているということである。

以上、メタファーとシネドキーについて確認したが、これらを含む3種の比喩の定義・性質・種類をめぐっては諸説あるが、本稿では基本的な上記の定義に従って分析を行う。

次に、4)の課題について、靱山(2020: 132)は、3)をさらに発展させたものとし、「多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味(スキーマの意味)を抽出すること、個々の意味を構成要素として含むフレームを明示すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを示すこと等が課題となる」と述べている。

この課題に取り組んだ研究としては、①「プロトタイプに基づくネットワーク(家族的類似カテゴリー(Taylor 1989, 1995², 2003³)、放射状カテゴリー(Lakoff 1987))」、②「プロトタイプとスキーマに基づくネットワーク(スキーマティック・ネットワーク)(Langacker 1987, 1988a, 1988b, 1990, 1999, 2008)」、③「フレームに基づくネットワーク(田中1990、国広1994、松本2010など)」、④「上記の『放射状ネットワークモデル』『スキーマティック・ネットワークモデル』『フレームに基づくモデル』を統合したモデル(靱山2021)」⁶⁾、⑤「類似関係・隣接関係・包摂関係に基づくネットワーク(瀬戸2007)」があげられる⁷⁾。

本稿で考察する「増える」の多義構造の説明については、上記の②「プロトタイプとスキーマに基づくネットワークモデル」が有効であると考え、以下では「増える」の多義構造を明らかにする前提として、Langackerの「スキーマティック・ネットワークモデル(schematic-network model)」について簡単に概観する。

ネットワークにおける個々の節点(node)は、「カテゴリー化関係(categorizing relationships)」によって関連付けられる。なお、「カテゴリー化関係」には、「スキーマ関係(schematicity)」と「拡張関係(extension)」という2つの基本的なタイプが関係している⁸⁾。

「スキーマ関係」、つまり[[A]→[B]]は、[A]が[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]を詳細化したもの(elaboration)あるいは具体化したもの(instantiation)であることを表す。言い換えれば、[B]は[A]と両立する(矛盾しない)が、([B]は)[A]より詳細であることになる(従って、この関係は意味の「特殊化(specialization)」あるいは、逆に言う「抽象化

(abstraction)」の関係となる)。

それに対して、拡張関係、つまり $[[A] \dashrightarrow [B]]$ では、若干の衝突が生じる。すなわち、拡張された意味 [B] に達するには、基本的意味 [A] のある意味特徴が保留あるいは変更されなければならない。つまり、拡張関係は意味における何らかの不一致を含むことになる⁹⁾。以上のことを図示すると、以下の図1のようになる。

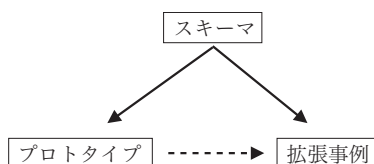


図1 Langacker (1990: 271, 図4 (a))

意味拡張の例として、Langacker (2008) から mail という語を取り上げる¹⁰⁾。名詞 mail には、少なくとも以下の意味 (1) と意味 (2) を認めることができる。

- 意味 (1)：郵便システムによって配達される、物理的な意味での伝言 ([MAIL]：普通の郵便)
- 意味 (2)：コンピュータによって、電子工学的に配信される伝言 ([EMAIL]：電子メール)

この2つの意味のうち、意味 (1) は mail のプロトタイプの意味として用いられると考えられる。また、意味 (2) は、意味 (1) から拡張関係 (メタファー) によって成り立っていると考えられる。つまり、両者の間には、〈伝言は主に言語によって表現され、書いて送ったものを相手が受け取って読むという一連の流れがあり、一定のネットワークを通じて配達される〉という共通の意味特徴を抽出することができる。つまり、スキーマは以下の意味 (3) のように示すことができる。

意味 (3) (スキーマ)：一定のネットワークを通じて配達される伝言 ([MAIL'])

なお、意味 (1) と意味 (2) の間には、それぞれ 〈伝言が紙に書かれ、物理的に配達される〉、〈伝言が (紙に書かれる代わりに) コンピュータの画面に現れる〉という点において不一致が見られる。以上のことを図示すると、以下のようになる。

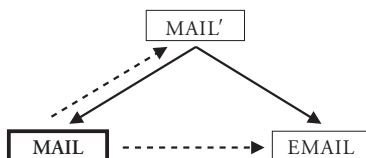


図2 Langacker (2008: 226, 図8.5 (c))

本稿では、Langacker が提唱する以上の「スキーマティック・ネットワークモデル」に基づき、「増える」の多義構造を明らかにしていく。

2. 「増える」の意味分析

2.1. 多義的別義

本節では、「増える」について4つの多義的別義を認め、考察を行う。

①別義(1)¹¹⁾：〈あるものの〉〈数量が〉〈多くなる〉

- (1) このキャリーバッグなら、荷物が {増えても} 安心だ。
- (2) 震災の影響で、赤字がどんどん {増えて} いく。
- (3) オンライン診療を導入する医療機関が、全国で {増えて} いる。
- (4) 年を重ねていくと、白髪が {増えて} いくのは、仕方のないことです。

別義(1)は、荷物、美術品、車、資産、貯金などの「物・財産」、地域、面積、コンビニ、病院などの「場所・空間・設備・機関」、タンパク質、筋肉、雲、にきびなどの「物質・現象」のように、様々なもの(具体物)の数量が多くなることを表す。

なお、漢字表記であるが、財産や蓄えがふえる場合は、「資産が殖える」というように、「殖」を用いることが多い。

②別義(2)：〈ある事柄の〉〈数量が〉〈多くなる〉

- (5) テレワークで家族との時間が {増えた}。
- (6) ビデオ会議の普及で、働き方の選択肢が {増えて} きた。
- (7) 半年間カナダに留学しただけなのに、格段に語彙数が {増えた} ように感じます。
- (8) 彼女との大切な思い出がまた一つ {増えて}、とても嬉しい。
- (9) 最近のがん診断の進歩により、小さな異常でも発見できる確率が {増えて} きた。

別義(1)は、荷物、車、マンションなどのような具体物の数量が多くなることを表す場合に用いられるのに対して、別義(2)は、残業、トラブル、笑顔、悩み、出会い、祝日、知識などのような抽象的な事柄が問題となる。つまり、時間、休日、チャンス、選択肢などの「時間・機会」、作業、残業、悩み、笑顔、トラブル、地震、負担などの「活動・心情・出来事・状況」、知識、情報、言葉、データ、割合、頻度、確率、速度などの「情報・言語・割合・程度」の数

量が多くなることを表す場合に用いられる。

ところで、別義(2)は別義(1)と(抽象的)類似性が認められることから、メタファー(隠喩)によって意味拡張していると考えられる。つまり、別義(2)と別義(1)の間からは〈ある対象の数量が多くなる〉という共通の意味特徴(スキーマ①)を導き出すことができるということである。

③別義(3)：〈人や組織、生き物の〉〈数が〉〈多くなる〉

- (10) 日々の努力の積み重ねでファンが少しずつ {増えて} きた。
- (11) 祭りのたびに、我が家の金魚が {増えて} いく。
- (12) 財政悪化などで、ふるさと納税に積極的に取り組む自治体が非常に {増えて} いる。
- (13) この会社では、雇用制度の抜本的な改革により、能力のある人材が著しく {増えた}。

別義(1)は、書籍、お金、パソコンのような物の数量が多くなることを表す場合に用いられるのに対して、別義(3)は、人や生き物の数が多くなることを表す場合に用いられる。

ところで、別義(3)は別義(1)と(抽象的)類似性が認められることから、メタファー(隠喩)によって意味拡張していると考えられる。つまり、別義(3)と別義(1)の間からは〈ある対象の数が多くなる〉という共通の意味特徴(スキーマ②)を導き出すことができるということである。

④別義(4)：〈生殖活動などにより〉〈人や生き物の〉〈数が〉〈多くなる〉

- (14) 自分と同じ種類の子孫や個体が {殖える} ことを、一般的に「生殖」と言う。
- (15) 土壌改善で、木の枝が太く大きくなり、実も一気に {殖えた}。
- (16) がん細胞がどんどん {殖えて}、あっという間に全身に転移してしまった。
- (17) ネズミは繁殖力が旺盛なため、放っておくとすぐに {殖えて} いってしまいます。

別義(3)は、単に人や生き物の数が多くなることを表す場合に用いられるのに対して、別義(4)は、一般的に子孫を残すという目的で、生殖活動などによって、(結果的に)その数が増えることを表す場合に用いられる。

ところで、別義(4)は別義(3)と(抽象的)類似性が認められることから、メタファー(隠喩)によって意味拡張していると考えられる。つまり、別義(4)と別義(3)の間からは〈人や生き物の数が多くなる〉という共通の意味特徴(スキーマ③)を導き出すことができるということである。なお、意味(4)と意味(3)の間には、それぞれ〈子孫を残すための生殖活動など

によって、人や生き物の数が多くなる〉、〈生殖活動以外の方法によって、人や生き物の数が多くなる〉という点において不一致が見られる。

漢字表記であるが、繁殖・増殖の意味で用いられる場合は、「子孫が殖える」のように、「殖」を使うことが多い¹²⁾。

2.2. 多義構造

以上、「増える」について、4つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「増える」は以下のような多義構造を成していると考えられる。

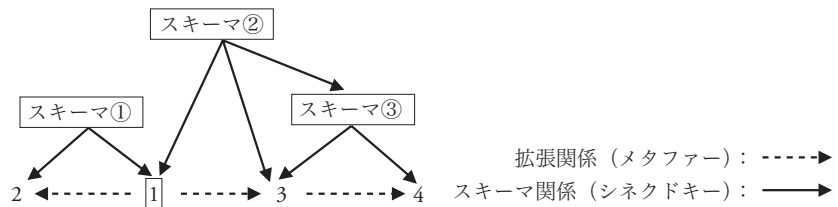


図3 「増える」の多義構造

以下、図3の「増える」の多義構造の表記について、簡略に説明をする。

- (a) 「増える」のプロトタイプ的意味は、別義(1)となる。
- (b) 別義(1)と別義(2)はメタファーの関係にあり、共通する意味として〈ある対象の数量が多くなる〉というスキーマ①を抽出することができる。
- (c) 別義(1)と別義(3)はメタファーの関係にあり、共通する意味として〈ある対象の数が多くなる〉というスキーマ②を抽出することができる。
- (d) 別義(3)と別義(4)はメタファーの関係にあり、共通する意味として〈人や生き物の数が多くなる〉というスキーマ③を抽出することができる。
- (e) スキーマ②は、スキーマ③とシネクドキーの関係にある。つまり、スキーマ②は、スキーマ③よりさらに高次のスキーマ(スーパースキーマ)であるということになる。

3. 日本語教育の観点からの考察——コロケーションの提示と非共起例(誤用例)分析

本節では、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導法について考察する。具体的には、「増える」の各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「非共起例(誤用例)」も提示し、その理由・原因について検討する。

3.1. 「増える」

3.1.1. 別義 (1) : 〈あるものの〉〈数量が〉〈多くなる〉

「コロケーション」

〈物・財産〉が：荷物、食品、美術品、在庫、材料、自動車、資産、収入、所得、金額、借金、赤字、資金、財産、預金、貯金

〈場所・空間・設備・機関〉が：家、施設、学校、面積、場所、店舗、地域、マンション、距離、物件、範囲、建物、医療機関

〈物質・現象〉が：体重、脂肪、分泌、コレステロール、筋肉、二酸化炭素、ホルモン、エネルギー、白血球、酸、雲、にきび

〈場所〉で：全国、欧米、途上国、沿岸地域、家庭、国内、学校

〈理由・原因〉で：影響、原因、効果、増税、上昇、運用、不況、減少、台風、悪化、低下、増加、大雨

〈状態〉：どんどん、年々、すぐ、次々、結構、いきなり、2倍に、大幅に、非常に、急に、急速に、着実に、順調に、明らかに、極端に、激的に、無限に

「非共起例 (誤用例)」

(18) a ?夏が {増えた}。

b ○地球温暖化で、猛暑の夏が {増えた}。

c ○夏が {長くなった}。

→数量の増加が想定しにくい場合は使いにくい。

(19) a ×琵琶湖が {増えた}。

b ○琵琶湖の面積が {増えた}。

→固有名詞など、唯一の存在については用いられない。

3.1.2. 別義 (2) : 〈ある事柄の〉〈数量が〉〈多くなる〉

「コロケーション」

〈時間・機会〉が：時間、日数、休日、期間、機会、ケース、選択肢、チャンス、出番、出会い

〈活動・心情・出来事・状況〉が：作業、雇用、残業、相談、依頼、サービス、交流、悩み、笑顔、楽しみ、思い出、トラブル、問題、地震、喧嘩、症例、負担、自殺、疾患

〈情報・言語・割合・程度〉が：知識、情報、項目、内容、言葉、語彙、ページ、メール、データ、記事、コンテンツ、アイテム、単語、書き込み、コメ

ント、割合、率、頻度、比率、確率、密度、速度、度合い
 〈場所・分野〉で：先進国、北欧、大学、地域、都会、諸国、世界中、製造業、スポーツ界
 〈理由・原因〉で：おかげ、理由、普及、関係、増加、ブーム、ストレス、病気、改革、改訂
 〈様態〉：さらに、少し、多少、だいぶ、ぐんと、ずっと、倍に、急激に、大幅に、確実に、
 格段に、膨大に

「非共起例（誤用例）」

(20) a ?試合の開始時間が {増えた}。

b ○試合の開始時間が {延びた}。

→ (物事の実施の) 時間が延期される場合は、使いにくい。

(21) a ?彼女の妊娠の噂が {増えた}。

b ○彼女の妊娠の噂が {広まった}。

c ○芸能人が有名になると、ネットの噂が {増える}。

→ 噂・情報などが拡散する場合は、使いにくい。

3.1.3. 別義 (3) : 〈人や組織、生き物の〉〈数が〉〈多くなる〉

「コロケーション」

〈人・組織・生き物〉が：生徒、留学生、患者、ボランティア、会員、友達、ファン、消費者、人材、得意先、取引先、自治体、学校、市民団体、ペット、花、金魚

〈場所・分野〉で：世界、海外、全国、各地、自治体、会社、産業界、医療分野、建築業界

〈理由・原因〉で：口コミ、積み重ね、緩和、きっかけ、震災、事故、改革

〈様態〉：非常に、どんどん、著しく、もっと、かなり、ちょっと、少しずつ、相当、5倍に、自然に、新たに、一気に、次第に

「非共起例（誤用例）」

(22) a ?親が {増えた}。

b ○自分の子供に注意しない親が {増えた}。

→ 数の増加が想定しにくい場合は使いにくい。

(23) a ×娘の京子が {増えた}。

b ○養子縁組で娘が {増えた}。

→ 固有名詞など、唯一の存在については用いられない。

3.1.4. 別義 (4) : 〈生殖活動などにより〉〈人や生き物の〉〈数が〉〈多くなる〉

「コロケーション」

〈人・生き物〉が：子孫、子、ネズミ、カブトムシ、細菌、ダニ、乳酸菌、細胞、微生物

〈理由・原因〉で：変化、原因、要因、進歩、改善、登場、導入、効果、繰り返し

〈様態〉：一気に、だんだん、ずいぶん、日に日に、みるみる、たちまち、数倍に、大量に、
あっという間に、顕著に、とたんに、異常に、過剰に

「非共起例 (誤用例)」

(24) a ?友達が {殖える}。(別義3 (「友達が増える」) は OK)

b ○子孫が {殖える}。

→繁殖・増殖が想定できない場合は使いにくい。

4. まとめ

以上、本稿では動詞「増える」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性 (多義構造) について考察した。その結果、「増える」について、4つの多義的別義を認定することができた。また、別義間の関連性については、比喩の観点から考察を行い、別義間の関連性を明らかにすることができた。さらに、「増える」の多義構造については、Langacker が提案している「スキーマティック・ネットワークモデル (schematic-network model)」を援用して、詳細に検討した。

次に、多義語分析の結果に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導法について考察した。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定され得る「非共起例 (誤用例)」も提示し、その理由・原因について検討した。

附記：本稿は『国立国語研究所基本動詞用法ハンドブック (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>)』において、筆者が担当した「増える」に修正・加筆したものである。

注

- 1) 1.1節と1.2節は、李 (2020) に基づくものである。
- 2) 池上 (1978)、瀬戸他 (2007)、吉村 (2013)、鍋島 (2016)、鷲見 (2019)、初山 (2021)、Cruse (1986)、Tuggy (1999)、Lakoff and Johnson (1999)、Taylor (2003³)、Evans and Green (2006)、Langacker (2008) などの先行研究においても、多義語の認定について同様の趣旨の記述が見られる。
- 3) Tuggy (1993) にも同様の趣旨の主張が見られ、ambiguity (両義性)、polysemy (多義性)、vagueness (漠然性) の連続性を指摘している。なお、この3つはそれぞれ同音異義語、多義語、単義語に対応すると考

えられている。

- 4) これらの定義は、佐藤 (1992 (=1978))、瀬戸 (1986, 1997)、靱山 (1997, 1998, 2002) などの研究を踏まえて提示したものである。
- 5) 鍋島 (2011) は、従来のメタファー研究の流れ及び認知言語学におけるメタファー理論を概観し、いわゆる「身体性メタファー理論」の枠組みに基づき、日本語のメタファーを理論的かつ実証的に考察している。
- 6) このモデルは、靱山 (2001, 2019) の記述をさらに発展させたものである。靱山 (2021: 240) は「この統合モデルは、放射状ネットワークモデル、スキーマティック・ネットワークモデル、フレームに基づくモデルを統合したものであり、3つのモデルの優れた点はそのまま継承し、さらにこれらを統合することによって、ある多義語の複数の意味すべてを包括的に記述・統合し、多義構造を明示することができるモデルである」と述べている。
- 7) 詳細については、鷺見 (2019: 575-581) を参照されたい。
- 8) スキーマとは、すべてのカテゴリーの成員に共通する性質を抽出した意味とされ、いくつもの具体例を通じて、一般化、抽象化される。
- 9) スキーマ関係と拡張関係についての記述は、靱山 (2000, 2001, 2021) に基づく。なお、靱山は、スキーマ関係は比喻の一種であるシネクドキーに相当し、拡張関係はメタファーに相当することを明らかにしている。
- 10) 鷺見 (2013: 35-37) に分かりやすく解説されている。
- 11) 本稿では、別義(1)を「増える」のプロトタイプの意味として考える。ただし、靱山 (2021) が「ある多義語のプロトタイプの意味は1つとは限らない」と指摘しているように、「増える」のプロトタイプの意味の認定についてはさらに検討が必要である。これと関連して、木下 (2019) は、多義語の複数の意味の中には、中心性を持つ語義(別義)とそうではない語義があるとし、松本 (2009) を踏まえて、その中心性には「直観的プロトタイプ」と「意味拡張の起点」という二つの種類が認められるとしている。なお、「直観的プロトタイプ」とは、「ある言語のある語の複数の意味の中で、母語話者(の大半)にとって、最も基本的な意味であると直観的に感じられる意味」(靱山2021) のことであり、松本 (2009: 90) では類似する概念として「機能的中心性」を用いている。また、「意味拡張の起点」とは、共時的な意味で「他の個別的意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味」(松本2009: 89-90) のことを言う。さらに、木下 (2019: 519) は、山梨 (2000)、松本 (2009) を踏まえ、この二種の中心性は、多くの場合、同一の語義が担うと考えられるが、両者にずれが生じる例もあると指摘している。なお、「増える」に関する詳しい考察は今後の課題としたい。
- 12) 同じ増加の意味を表す語に「増す」がある。ただし、「増える」は数量そのものに重点が置かれるのに対して、「増す」は一般的に、程度性に注目する場合に用いられやすい。
 - (i) a ○体重・川の水が {増える}。
b ○体重・川の水が {増す}。
 - (ii) a ○貯金・洋書が {増える}。
b ?貯金・洋書が {増す}。
 - (iii) a ?強度・長さが {増える}。
b ○強度・長さが {増す}。

例(ii)のように、量そのものに重点が置かれる場合は「増える」が、例(iii)のように程度性に注目する場合は「増す」が用いられやすい。

参考文献

- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界：現代言語学から視る』, NHK ブックス。
 李澤熊 (2020) 『日本語の意味研究の新たな扉を開く一意味分析の方法と実際一』, 開拓社。
 北原保雄 (2011) 『明鏡国語辞典』第3版, 大修館書店。

- 木下りか(2019)「多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ」、『日本認知言語学会論文集』第19巻, pp. 519-524, 日本認知言語学会.
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』, 大修館書店.
- 国広哲弥(1994)「認知的多義論—現象素の提唱」、『言語研究』第106号, pp. 22-44, 日本言語学会.
- 佐藤信夫(1992(=1978))『レトリック感覚』, 講談社学術文庫.
- 新村出(編)(2008)『広辞苑』第6版, 岩波書店.
- 鷺見幸美(2013)「第2章 カテゴリー化とプロトタイプ」, 森雄一・高橋英光(編著)『認知言語学 基礎から最前線へ』, pp. 27-50, くろしお出版.
- 鷺見幸美(2019)「多義性と認知言語学」, 辻幸夫他(編)『認知言語学大事典』, pp. 572-582, 朝倉書店.
- 瀬戸賢一(1986)『レトリックの宇宙』(MONAD BOOKS 48), 鳴海社.
- 瀬戸賢一(1997)「意味のレトリック」, 卷下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』(日英語比較選書1), pp. 93-183, 研究社出版.
- 瀬戸賢一(2007)「メタファーと多義語の記述」, 楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』, pp. 31-61, ひつじ書房.
- 瀬戸賢一他(編)(2007)『英語多義ネットワーク辞典』, 小学館.
- 田中茂範(1990)『認知意味論 英語動詞の多義の構造』, 三友社出版.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』, くろしお出版.
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』, ひつじ書房.
- 松村明(編)(2006)『大辞林』第3版, 三省堂.
- 松村明(監)(2012)『大辞泉』第2版, 小学館.
- 松本曜(2009)「多義語における中心的意味とその典型性:概念的の中心性と機能的の中心性」, *Sophia Linguistica*, 57, pp. 89-99, Sophia University.
- 松本曜(2010)「多義性とカテゴリー構造」, 澤田治美(編)『語・文と文法カテゴリーの意味』(ひつじ意味論講座1), pp. 23-43, ひつじ書房.
- 初山洋介(1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」, 『名古屋大学国語国文学』第80号, pp. 29-43.
- 初山洋介(1998)「換喩(メトニミー)と提喩(シネクドキー):諸説の整理・検討」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』第6号, pp. 59-81, 名古屋大学留学生センター.
- 初山洋介(2000)「名詞『もの』の多義構造—ネットワーク・モデルによる分析」, 山田進・菊地康人・初山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』, pp. 177-191, ひつじ書房.
- 初山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」, 『認知言語学論考』No. 1, pp. 29-58, ひつじ書房.
- 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る), 研究社出版.
- 初山洋介(2010)『認知言語学入門』, 研究社出版.
- 初山洋介(2016)「多義語の多様性:典型的な多義語と単義語寄りの多義語」, 『日本認知言語学会論文集』第16巻, pp. 512-517, 日本認知言語学会.
- 初山洋介(2019)「多義語分析の課題と方法」, プラシャント・バルデシ・初山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也(編)『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』, pp. 32-50, 開拓社.
- 初山洋介(2020)『実例で学ぶ 認知意味論』, 研究社.
- 初山洋介(2021)『[例解] 日本語の多義語研究—認知言語学の観点から』, 大修館書店.
- 初山洋介・深田智(2003)「第3章 意味の拡張」, 松本曜(編)『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻), pp. 73-134, 大修館書店.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 森山新(編著)(2012)『日本語多義語学習辞典 動詞編』, アルク.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之(編)(2012)『新明解国語辞典』第7版, 三省堂.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』, くろしお出版.

- 吉村公宏 (2013) 「多義性 (polysemy)」, 辻幸夫(編) 『新編 認知言語学キーワード事典』, pp. 217–218, 研究社出版.
- Cruse, D. A. (1986) *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans, V. and M. Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論』, 紀伊国屋書店.)
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988a) “A View of Linguistic Semantics.” In Rudzka-Ostyn, B. (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 49–90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1988b) “A Usage-Based Model.” In Rudzka-Ostyn, B. (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 127–161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』, 研究社出版.)
- Taylor, J. R. (1989, 1995², 2003³) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫他訳 (2008) 『認知言語学のための14章』, 紀伊国屋書店.)
- Tuggy, D. (1993) “Ambiguity, Polysemy, and Vagueness.” In *Cognitive linguistics* 4(3). pp. 273–290.
- Tuggy, D. (1999) “Linguistic Evidence for Polysemy in the mind: A Response to William Croft and Dominiek Sandra.” In *Cognitive Linguistics* 10(4). pp. 343–368.

例文出典

※本稿における例文は、以下のコーパスを参考にして作った作例である。

- (1) 『NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)』 (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- (2) 『NINJAL-LWP for TWC (NLT)』 (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>)
- (3) KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

キーワード：多義語、多義構造、比喩表現、ネットワークモデル、コロケーション

Abstract

A Semantic Analysis of *hueru*:
From the Viewpoint of Japanese Language Education

LEE Tackung

This text described the multiple meanings of the verb *hueru* in addition to discussing the relation between these multiple meanings (the polysemic structure). Resultantly, it was acknowledged that there were four equivocal different meanings acknowledged for *hueru*.

Furthermore, the relation between the different meanings was considered by looking at the two types of symbolic language, metaphor and synecdoche, and it was thus possible to clarify the relation among the different meanings.

Moreover, based on the results of a polysemy analysis, the research considered a method for effectively teaching people to learn all these different meanings. Specifically, a collocation for each different meaning was presented to promote learning, after which the examples of misuse that could be expected for each separate meaning were also presented and the causes and reasons for the misuse examined.

Keywords: polysemic word, polysemic structure, metaphorical expression, network model, collocation